

「中村哲医師を支えた看護士」

3月23日(土)に、パキスタンやアフガニスタンで医療・人道支援事業を進め、川崎市国際交流センターのホールを埋め尽くした参加者は、ドキュメンタリー映画「荒野に希望の灯をともし」(短縮版)の鑑



活動に加わる決心をする

看護学校を卒業して病院で働いていたときに中村先生の講演を聞いたのが、先生との出会いです。「女性のハンセン病患者の早期発見・治療が必要で、誰か手伝える人はいないか」というお話を覚えています。活動に加わる決心をした一番の理由は、女性患者「ハリマ」と出会ったことです。下見のために私が初めて現地ペシャワールの病院のハンセン病棟を訪れると、庭にいた彼女がギョッと曲がった手を出してかわいらしい声で「シスター」と言って、すごく嬉しそうに迎えてくれたのです。ハンセン病の患者を見るのは初めてでしたが、抵抗なく握手をして、抱きついて挨拶をしたことに自分自身でも少し驚きました。もう一つの理由はパキスタンの料理を美味しく食べられたこと、この2つですね。

あなたの家族にも同じようにするの？

現地では、日本とは環境や教育、時間の流れも全く異なり、言葉も分からずに苦労しました。仕事が終わった後に、毎晩、宿舎で中村先生からウルドゥー語やパシュトー語を習いました。タリバン政権は女性の教育を制限していると国際社会で非難されていますが、男性でも学校に行っていない人がたくさんいます。ハンセン病棟で働く職員は学校に行きライセンスを持っているのでエリート意識が非常に高く、傷が膿んで異臭もある患者たちを手厚く介護することはありません。最終的に、私たちはこの意



鎮魂の「三本柳さんさ踊り」を奉納する「祭音」

識を変えるのは大変難しいと考え、自分たちでメディカルアシスタントを育てることにしました。現地の人たちは家族をととても大事にします。教えるときは、医療の説明などよりも「あなたの家族にも同じようにするの?」という言葉が一番彼らに響きました。

中村医師が残した最大のもの

2000年の酷い干ばつの時に井戸を掘り始め、翌年の同時多発テロの後、アメリカの空爆が始まる中では食料の配給もしました。配給を続けるうちに、「アフガンの人たちはいつまで人から食料をもらって生活しなければいけないんだろうか」とだんだん複雑な気持ちになっていきました。タリバン政権が崩壊して無政府状態になり、配給を中止した後、中村先生が「アフガニスタンは農業国だから畑を耕したらいいんだ」と用水路を引くことを決意されたとき、私はアフガン人の職員と一緒に「ばんざい!」と喜びました。2005年に初めて用水路が開通し、水を通したときにはすごく感動しました。1km、2kmと出来上がったところまで水を通すたびに、病院の職員たちも皆で喜びを分かち合いました。今、PMS(注1)の職員は、医療分野や用水路建設、農業も含めて90



数名います。この人たちが私たちの宝であり、アフガニスタンの宝でもあると思っています。彼らが用水路を作り、その技術を他の人たちにも伝えて、アフガニスタンの国造りに貢献することをずっと祈っています。

(注1) 和名「平和医療団」。中村哲医師が設立した現地事業体。



アフガニスタン・イスラム共和国
面積 652,225km²
人口 3,890万人
首都 カブール
言語 タリ語、パシュトー語



パキスタン・イスラム共和国
面積 796,000km²
人口 2億4,149万人
首都 イスラマバード
言語 ウルドゥー語、英語



泥水を飲む子ども
「薬で飢えや渴きは治せない」(中村哲)



2001年 農地用井戸(直径5m)

「看護師 藤田千代子 講演会」

凶弾に倒れた中村哲医師を支え続けた藤田千代子さんの講演会を行いました。
賞後、かわさき国際交流民間団体協議会の会長山本忠利さんが聞き手を務める中、藤田さんの話に熱心に聞きいりました。

相澤編集ボランティアから藤田さんにインタビュー！

Q 考え方の違いをどう乗り越えましたか？

現地の人と一緒に仕事をし、お互いに理解し合えるまでずいぶんかかりました。たとえば抗生剤の注射を6時間おきにする、決まった時間にリハビリをする、といったときに、日本ではきちんと時間を守りますが、現地ではそうはいかない。待てないでやってしまうとあつという間に仕事が終わってしまう。ある時、中村先生からすごく怒られたんです。「あんたたちが主役じゃなか。あんたたち外国人はいつかここを去るでしょ」って。一生懸命働いたのにすごく怒られて、目が覚めた感じです。先生からは「日本が当たり前と思ったら大間違いで、日本は全世界で見るとすごく特殊だと考えた方が良くと思うよ」とも言われました。現地の言葉で「タックリバーン」という言葉があります。「大体」という意味で、抗生剤の注射量を測るのもその「大体」ですし、時間も1時間遅れなんて、なんてことないんですよ。私もそれに慣れたら楽になっていきました。

Q 女性はどのような生活を？

アフガニスタンでもパキスタンでも、女性に対してカメラを向けるのは大変失礼な行為です。講演会で映したメディカルアシスタント育成のスライドでも男の子だけが点滴を扱っていましたが、実際は女の子も3人くらいトレーニングしています。女の子たちの教育制限がありますが、タリバンの人たちの中にも自分の娘の学びたいという想いを叶えたいと考える人がたくさんいます。現地に行き、経済制裁の中でも一生懸命ルールを作って国造



りをしようとしている姿を見ていると、もう少し温かい目で見ても良いのではないかと思います。

現地の職員の家庭はほとんどが「かかあ天下」です。女の人たちはすごく口が立って強くて、お宅に何うと職場で威張っていた人が隅っこで小さくなっていたりします。中村先生もそれを良くわかっていて「職員と仲良くやりたいなら、奥さんに綺麗なハンカチでも買ってきたら良いよ」と、最初にアドバイスされました。



メディカルアシスタントの育成
(右から二番目は藤田さん)



1984年 中村医師(真ん中)ペシャワール
ミッション病院にて活動開始(38才)

Q 現地の料理は？ 買物の仕方は？

ナンも美味しいですし、ターメリックなどいろいろな香辛料を混ぜて作るカレーも美味しいです。各家庭の味があり、(香辛料を買うときは)バザールで混ぜてもらって買います。買い物は男性の仕事で、女性は楽ですよ。買い物では値段交渉が必ずあり、人と人の関係が濃いです。現地のそういうところが面白いと思いますし、それに慣れると日本では人との関係が浅いように感じます。



2024年 現地PMS^(注1)の人々と藤田さん。「中村先生が実践してきた事業は全て継続し、中村先生が望んだ希望は全て引き継ぐ」(ペシャワール会)

(取材・文：編集ボランティア 相澤弥生、撮影：編集ボランティア 松波陽介、講演資料提供：国際NGO(NPO)団体ペシャワール会^(注2)
(注2) 1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成された国際NGO(NPO)団体。



2003年「川から水を引いてみよう」



2024年3月4日
バラコット用水路完成間近



通水した用水路ではしゃぐ子どもたち



農地約200ha開墾
「PMSの活動地にのみ希望を感じる」(中村哲)